



保健通信



H30.10.23 徳島文理小学校

10月4日(木)に、学校内科医の篠原 明宏先生をお招きして、「風疹」をテーマに学校保健安全委員会を実施いたしました。

日本において風疹は、1990年代までは、5～6年ごとに全国において大規模な流行が見られていました。1995年4月に男女幼児が定期予防接種の対象になってからは、全国においての大規模な流行は見られなくなりましたが、2004年に、約4万人以上の大規模な流行があり、今年の夏にも大きな流行がありました。

風疹は、麻疹ほどの強い感染力はもっていませんが、感染すると、髄膜炎や脳炎などの重篤な合併症を起こす場合があります、危険な感染症の一つです。

ご家庭でも、下記の資料を参考にいただければと思います。

1. 風疹とは

麻疹に似た発疹ができる病気で、発熱、発疹、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹症である。症状が軽く、2～3日で発疹が消えるところから「三日はしか」ともよばれる。症状は、不顕性感染（感染しているが、症状が出ない状態）から、重篤な合併症併発（髄膜炎、脳炎など）まで幅広く、臨床症状のみで風疹と診断することは困難な疾患である。

病原体はウィルスの一種で、飛沫感染するが感染力は麻疹ほど強くない。罹患すれば終生免疫が得られる。成人では重症化傾向がみられ、特に妊娠20週頃までの女性が罹患すると、先天性風疹症候群の子どもを出産する危険性がある。

2. 臨床症状

感染から14～21日の潜伏期間の後、発熱、発疹、リンパ節腫脹が出現する。発熱は風疹患者の約半数に見られる程度である。3徴候のいずれかを欠くものについての臨床診断は困難であることに加え、溶血性連鎖球菌による発疹、伝染性紅斑など似た症状を示す発熱発疹性疾患と薬疹との鑑別が必要になり、確定診断のためには検査室診断を要する。

3. 2018年の風疹急増に関する緊急情報

2018年第1～37週の風疹患者累積報告数は、642人となり、第36週までの累積報告数496人から146人増加した。2018年は第35週時点で2008～2011年及び2014年～2017年の年間累積報告数を越え、2008年の全数届け出開始以降では、2013年、2012年に次いで3番目に多い報告数となった。過

去には2013年に14,344人の患者が報告され、この流行に関連した先天性風疹症候群が45人確認されている。

2013年の流行以来は、2014年319人、2015年163人、2016年126人、2017年93人と減少傾向であった。しかし、2018年7月以降、急増に転じている。

徳島県においては、9月初めに2015年以来3年ぶりとなる患者が発生した。また、10月初めにも2例目となる患者が発生している。全国的には東京都や千葉県などの首都圏と、愛知県などの感染が多い。

4. 2008年の「全数届出」以降の風疹の患者報告

報告患者の95%（612人）が成人で、男性が女性の4.8倍多い。（男性532人、女性110人）男性患者の年齢中央値は41歳で、特に30～40代の男性に多く（男性全体の62%）、女性患者の年齢中央値は29歳で、特に20～30代に多い（女性全体の57%）。予防接種歴は無し（152人：24%）、あるいは不明（442人：69%）が93%を占める。

風疹はワクチンによって予防可能な疾患である。今回報告を受けている風疹患者の中心は、過去にワクチンを受けておらず、風疹ウイルスに感染したことがない抗体を保有していない集団である。

日本において風疹ワクチンは、1977年8月～1995年3月までは中学生の女子のみが定期接種の対象であった。1989年4月～1993年4月までは麻疹ワクチンの定期接種の歳に、麻疹おたふくかぜ風疹混合ワクチンを選択しても良いことになった。当時の定期接種対象年齢は生後12ヶ月以上72ヶ月未満の男女であった。

1995年4月からは生後12ヶ月以上90ヶ月未満の男女に変更になり、経過措置として12歳以上～16歳未満の中学生男女についても定期接種の対象とされた。

2006年度から麻疹風疹混合（MR）ワクチンが定期接種に導入され、1歳と小学校入学1年前の幼児の2回接種となり、2008～2012年度の時限措置として、中学1年生あるいは高校3年生相当年齢の者を対象に2回目の定期接種が原則MRワクチンで行われた。

風疹含有ワクチンの定期予防接種制度と年齢の関係
(平成30(2018)年9月1日時点)

